

# 看護師のワーク・ライフ・バランス実現に向けた看護師長のコンピテンシーに関する研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 小百合 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2003350">https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2003350</a>

## 論文内容の要約

学 生 番 号	3215007
氏 名	鈴木 小百合

主 査	飯島 佐知子 教授
副 査	植木 純 教授
副 査	村中 陽子 教授

学 位 論 文 名	看護師のワーク・ライフ・バランス実現に向けた看護師長のコンピテンシーに関する研究
訳 タ イ ト ル	A study on the competency of the head nurses in realization of work-life balance among nurses
共 著 者	

論文内容の要約 (1,000 字～1,500 字)

### 【目的】

病院の看護師の就業継続には、WLBの視点にたった人材マネジメントが必要とされている。WLB支援制度を利用し就業を継続する看護師が増加する今日、看護師長には、背景の異なる多様な人材の能力を活かしつつ、看護師のWLBを実現することが求められている。看護師のWLB実現の度合いは、看護師長のコンピテンシーに影響すると考えられるが、看護師のWLB実現に向けて看護師長が指標とすべきコンピテンシーは、示されていない現状にある。

本研究では、看護師のWLB実現に向けた看護師長のコンピテンシーを明らかにするとともに、看護師のWLB実現に向けた看護師長のコンピテンシー評価尺度を作成し、信頼性と妥当性を検証することを目的とする。

### 【方法】

コンピテンシーを明らかにするための前提となる研究として、看護管理者（看護師長、あるいはその役割を担う者）にインタビュー調査を行い、看護師のWLB実現に向けた看護管理者の認識と実践を明らかにした。次に、インタビュー結果および文献検討に基づくコンピテンシーの構成概念の明確化、コンピテンシーを構成する質問項目の作成、質問項目と概念の合致と吟味を経て尺度原案を作成した。この尺度原案の構成概念を検討するために、病院年鑑 2014 年版（No2 関東版）より無作為に施設を選定し、研究への協力が得られた 83 病院の看護師長 521 名を対象に調査を行った。さらに、尺度の信頼性と妥当性を検討するために、日本医師会 JMAP のシステムを活用して、層化無作為抽出法により施設を選定し、研究への協力が得られた 431 病院の看護師長 2898 名を対象に調査を行った。

### 【結果】

看護師のWLB実現に向けた看護管理者の認識と実践として、【個々の状況の配慮につながるコミュニケーション】【個々の状況を配慮した対応】【個々のキャリア支援】【チームワークの醸成】【部署のマネジメント】【安心を生む存在であること】の6カテゴリーが生成された。また、看護師のWLB実現に向けた看護師長のコンピテンシーとして、17コンピテンシー『ビジョンの共有』『発信力』『リーダーシップ』『エンパワーメント』『相互理解』『課題認識アセスメント』『業務管理』『患者志向』『公平性』『関係構築力』『他者理解』『能力開発』『承認』『率先垂範』『セルフコントロール』『柔軟性』『自己確信』を導き、計83項目からなる尺度の原案を作成した。

83項目からなる尺度原案を用いて看護師長を対象に調査をし、289名の回答に基づいた分析（項目分析・因子分析）を経て、9因子41項目の尺度が構成された。その後、9因子41項目からなる尺度を用いて全国の看護師長を対象に調査をし、1743名の回答に基づいた分析（項目分析・因子分析）を経て、最終的に【組織目標の明確化とキャリア支援】【ビジョンの共有】【個の能力を活かした運営管理】【看護実践における問題解決行動】【WLB支援制度の理解の推進】【休暇取得の透明性・公平性確保】【中間管理職としての責任ある行動】【対人関係構築の基盤となる柔軟性】からなる8因子38項目の尺度が構成された。

### 【考察】

38項目からなる尺度は、8因子それぞれが直接的もしくは間接的に「看護師のWLB実現」に寄与しながら、すべてが融合して成立していると考えられた。また、尺度全体および因子別のCronbachの $\alpha$ 係数が0.70以上で、信頼性の高い尺度であると示された。

### 【結論】

8因子38項目からなる「看護師のWLB実現に向けた看護師長のコンピテンシー評価尺度」を作成した。

尺度は、内的整合性の確認および因子分析により信頼性と妥当性を検証できたが、尺度の実用化に向けて、基準関連妥当性を検証することが今後の課題である。